

ノーベル物理学賞 真鍋叔叔さんから感じたこと

校長 細江 幸次

10月初旬、真鍋叔叔博士がノーベル物理学賞を受賞されたというニュースが流れました。今では一般に方たちでも知っている地球温暖化をもう50年も前にコンピュータを用いて予測し、科学的な論点を明確にして現在に至るまでの未来予測をほぼピタリと言い当てていたという研究に対する荣誉です。また、その研究が礎となり、現在の地球温暖化予測に真鍋博士の研究は色あせることなく理論の中核として使われている点にも驚かされます。真鍋博士の研究の素晴らしさや偉大さについては今更私が書くまでもなく、様々なところで紹介されているので、割愛させていただきます。様々な報道で真鍋博士のことが紹介される中、私自身が心を揺さぶられ、刺激を受けたこと2つについて述べたいと思います。

1 真鍋博士の話し方

ノーベル物理学賞受賞が報じられた当日の夜、いくつかの番組で真鍋博士のインタビューの様子が放送されていました。真鍋博士は現在90歳という高齢の方です。過去の映像であっても2、3年前のものばかりでした。しかし、インタビューの受け答えは的確で、言い淀みも言い直しもない、とても流ちょうな話し方で私たちのような一般人にもわかる平易な言葉を使ったものでした。私たちの会話の中によくある「あの～」、「えーっとー、」という言葉が入らないだけで話はこんなにも聞きやすくなるのかと自己反省をしたくらいです。インタビューですから、予めいらかの打合せはしているのですが、手元に原稿もメモもなく話をされている様子には私は驚きだけでなくむしろ憧れまで感じてしまいました。

頭の中に話したいことが整理されていること、どのような言葉でどのように伝えたら聞き手に正しくわかってもらえるかがわかっているのでしょう。



2 自分のやっていることに対する思い

真鍋博士はインタビューの中で、「自分のやっていることがおもしろくてたまらない。」ということを話していました。その裏付けとなるのが、現在でも米国で上級研究員として研究活動が続けているということです。日本の科学者の場合、ある程度の成果を上げ、一線を退いた形で「名誉教授」という肩書の方が多いです。90歳という年齢になっても、今なお現役の研究者というところに、真鍋博士の先に述べた気持ちが端的に表されていると思うのです。いくつになっても目標(楽しみ)を失わないところは学ぶべき生き方であると感じました。



ここで述べた真鍋博士の2つの姿は私たちが目指す理想の子ども像ともつながっていきます。もちろん、小学生である上矢作っ子にいきなり博士の姿を重ね合わせるのは無理があります。しかし、本文に掲載した2枚の写真「理科実験に向かう子の表情」「運動会練習で団の仲間に出している子の姿」に真鍋博士の姿につながる片鱗を私は感じています。